

# 草戸木簡にみる流通・金融活動

下津間康夫

Aspects of Commercial and Monetary Transactions from Wooden Tablets with Inscriptions Discovered at the Kusado Sengen-cho Site

はじめに

①木簡の具体例

②草戸木簡の特質

おわりに

## 【論文要旨】

広島県福山市の草戸千軒遺跡は、芦田川が瀬戸内海に注ぎ出る河口付近に成立した中世の港町である。出土資料の中に、物品名・数量・金額・商行為などを記した木簡があり、地方都市における商業・流通・金融活動の一端がうかがえる好資料である。主に商取引に関わるメモ、荷札・付札として使用されており、記載者が自らの活動に関わる内容を記したものの、何らかの物品に付属してその実態の一端を示すものに大別される。町は一三世紀中頃に成立し、当初の段階から物資の集散や金銭の取引に関わる活動が推定されるが、一四世紀中頃より活発になる。記載者の手元でメモ・記録簿として使用された木簡がまとまって存在しており、その内容を検討することで、活動の実態を推察することが可能になる。その結果、一四世紀中頃から一五世紀後半にかけて、草戸千軒に拠を置いて、周辺地域を対象に、農産物を中心とする各種の物品を取り扱い、金銭の貸付けや、年貢・租税の収納・運営に関与する者の存在が推定さ

れることになった。

草戸木簡に特徴的な形状として、材の上部に穿孔したものがある。一五世紀代に多く用いられ、メモとして断片的な語句が並んでおり、これを基に帳簿類を作成したことも想定される。やがて、文言がメモとしての機能を終了すると、削り取られて削屑を生み出すと共に、木簡は白紙としての木札に再生し、繰り返し使用されることになる。そして、多量の木札が準備されながらも、遺構の埋立ての際に投棄された例は、木札を使用する活動の停止を示すものである。

なお、草戸千軒において、流通・金融などの活動に関わる場合は、継続的に町の中心区的区画の一面を占めており、町における機能の位置を示唆すると共に、芦田川や瀬戸内海に通じていたと想定される水路の推移と密接に関連している。